**「菅原道真の生涯」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

菅原の道真の生涯を漢詩と和歌により紹介いたします。

　菅原道真は、祖父、父を「」とする学者の一族の子として八四五年に生まれました。学者の後継者として幼年の頃から厳しい教育を受け、４歳で初めて書を読み、８歳で歴史書を理解し、１８歳で大学寮の試験に合格して文章生となり、更に研鑽を続けて３３歳の時に「文章博士」となりました。

　道真は、１１歳の時、初めて**「 を見る」**という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**月燿如晴雪　　　はの如く**

**梅花似照星　　　はに似たり**

**可憐金鏡転　　　れむし り**

**庭上玉房馨　　　に香れるを**

道真は１６歳の時、**「をし得たり」**という詩を作りました。「賦し得たり」という言葉は、詩題を与えられて作ったことを意味し、「」はの詩で、の詩が有名です。この詩は「折楊柳」という詩題を与えられて作った物ですが、１２句（６韻）のであり、科挙の答案を意識した物です。

**佳人芳意苦　　　 なり**

**楊柳先攀折　　　 ず す**

**應手麴塵輕　　　手に応じては く**

**候顔青眼潔　　　をうに し**

**涙迷枝上露　　　涙は迷う の露**

**粧誤絮中雪　　　いは迷う の**

**纖指柔英斷　　　き指 をち**

**低眉濃黛刷　　　れる をく**

**葉遮鬟更亂　　　葉りて 更に乱れ**

**絲剪腸倶絶　　　れて にゆ**

**若有入羌音　　　しに入る 有らば**

**誰堪行子別**　　**かん の別れに**

白居易の詩「」は成語となっており、琴を弾くこと、酒をたしなむこと、詩を作ることは教養人のたしなみの一つとされていました。道真も琴を習いましたが、才能が無く、習うのを断念しました。有名な「の詩」において、「琴を弾き」ではなく「琴を聞き」とされているのはこのことによる物です。

　２６歳の時に作られた**「を習うのをむ」**を紹介いたします。

**偏信琴書学者資　　　に信ず 琴と書とは 学者のなりと**

**三餘窓下七条絲　　　の 七条の糸**

**専心不利徒尋譜　　　すれど利あらず にをぬ**

**用手多迷數問師　　　手を用いたれど迷うこと多く 師に問う**

**断峡都無秋水韻　　　 て の無く**

**寒烏未有夜啼悲　　　　未だの悲しみ有らず**

**知音皆道空消日　　　はう しく日を消すと**

**豈若家風便詠詩**　　**に家風の詩を詠ずるにあるにかめやも**

　このようにして、道真は文人としての道を歩みました。２７歳の時に**「八月十五夜に旧を語る」**という詩を作りました。この詩は詩会の席において、韻字をくじ引きで決め、「心」という韻字を得て作られたものです。なお、旧暦八月の十五夜の月を愛でることは杜甫に始まったとされており、白居易の影響により平安貴族の習慣になったものと思われます．幼い頃の旧友と再開したときの心境を詠ったものです。

**秋月不知有古今　　　は知らず 有るを**

**一條光色五更深　　　の 深し**

**欲談二十餘年事　　　らんと欲す 二十余年の事**

**珍重當初傾蓋心**　　　**珍重す当初の の心を**

当時の、朝廷での政治は早朝から行われるのが通例でした。雪の降る中での出勤には、寒さが身にしみ、酒を飲んで体を温めてから出勤することもあったようです。このような、寒さの中での早朝の出勤を、道真は**「」**という詩に表しています。紹介致します**。**

風送宮鐘繞漏聞　　　**風はを送りて 聞こゆ**

催行路上雪紛紛　　　 **を催す路上に 雪たり**

稱身着得裘三尺　　　**身にいてることを得たり**

宜口温來酒二分　　　**口にいて温め来る 酒**

怪問寒童懐軟絮　　　**しみて問う のをくかと**

驚看疲馬蹈浮雲　　　**驚きて看るの をむかと**

衙頭未有須臾息　　　**未だもうこと有らず**

呵手千廻著案文　　　 **をす**

ある日、道真は、地方官の決定であるが行われた翌朝に、右大臣源多の邸宅を訪れました。人事が決定するまでは、請願のために多くの人々が詰めかけましたが、決定した後は、人一人いない寂しさでした。道真は**「 のにぎる」**と言う詩を作り、こんなことでは、お亡くなりになった後では、屋敷は荒れ果てるだろうと、その状況を詠いました。その詩を紹介いたします。

**除目明朝丞相家　　　のくる が家**

**無人無馬復無車　　　人無く馬無く 車無し**

**況乎一旦薨亡後　　　やしをや**

**門下應看枳棘花　　　門の看るべし の花**

学者としての道真は、来朝した外国の使者の接待にも当たりました。から来朝した使者の送別会が「」で開かれ、そのとき、道真は**「夏の夜に、にして、の帰郷するにす」**という詩を作り、はなむけとしました。別れることの悲しみを匠に表した詩です。この詩を紹介いたします。

**帰歟浪白也山青　　　帰らん 白く山青し**

**恨不追尋界上亭　　　むらくはの亭を せざることを**

**腸斷前程相送日　　　はゆ に送る日**

**眼穿後紀轉來星　　　眼はたる にび来る星**

**征帆欲繫孤雲影　　　 がんとすの影**

**客館爭容數日扃　　　 でかれん数日の**

**惜別何為遙入夜　　　 れぞ遙かに夜にる**

**縁嫌落涙被人聽**　　　 **人にかるることを嫌うにる**

　道真の提言により遣唐使が廃止されて以後、このように交流の主な相手国はでした。道真は、来朝した渤海国のという詩文に優れた人と、特に親しかったようであり、帰国前に肖像画を描かせました。裴大使が帰国した後で、その肖像画を見て**「のがを見て感有り」**という詩を作り、姿は分かるが、その心までは分からないと詠っています。この詩を紹介いたします。

**自送裴公萬里行　　　がのを送りてより**

**相思毎夜夢難成　　　いてに 夢成りたし**

**真図対我無詩興　　　我にえども 無し**

**恨写衣冠不写情**　　　**らくは のみ写してを写さざるを**

道真は４２歳の時、の職を解かれ、に任ぜられました。左遷とは言えないまでも、学者として生きてきた道真にとっては、この転任は満足の行く物では無かったようです。任地に赴く途中、**「にて春を送る」**という詩を作り、都を離れることの寂しさ、悲しさを詠いました。この詩を紹介いたします。

**春送客行客送春　　　春はを送り　は春を送る**

**傷懐四十二年人　　　をむ　四十二年の人**

**思家涙落書齊舊　　　家を思わば涙落つ　書斎はたらんかと**

**在路愁生野草新　　　に在らば生ずれども 野草は新たなり**

**花為随時餘色尽　　　花は時に随がわんが為に尽き**

**鳥如知意晩啼頻　　　鳥はを知るが如く なり**

**風光今日東歸去　　　風光 東に帰り去る**

**一兩心情且附陳　　　一両の心情 しべん**

となった道真は、**「し」**という十首の詩を作りました。これらの詩は「」という技法を用いて作られ、全ての詩が、同じ字をとして同じ順で使って作られています。それぞれの詩は、下層人民の悲哀を詠った物で、個別のテーマを持っています。そのうちの其の三を紹介いたします。この詩のテーマは、妻を亡くした老人の悲哀です。

**何人寒気早　　　にか 寒気早し**

**寒早老鰥人　　　寒は早しの人に**

**転枕雙開眼　　　枕をがして び開く眼**

**低簷独臥身　　　をれて、独り臥す身**

**病萌逾結悶　　　しては えを結び**

**飢迫誰愁貧　　　りては に貧をりょう**

**擁抱偏孤子　　　す なる子**

**通宵落涙頻**　　　 **なり**

　任地での道真は、都を離れて一人で秋の月を見て、ひときわ寂しさを感じ、その心境を**「の月」**という詩に表しました。この詩を紹介いたします。

**千悶消亡千日酔　　　 す のい**

**百愁安慰百花春　　　す の春**

**一生不見三秋月　　　 の月を見ずんば**

**天下應無腸斷人**　　**天下に無かるべし の人**

**道**真は、４３歳の時、休暇として一時的な帰郷を許されました。途中、現在の京都府大崎町であるという宿場町に立ち寄ったときに、赴任するときに会った知人である王氏を訪ねると、その人は死去していました。道真は、その詩を悼んで**「の駅に到り 感ありて泣く」**という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**去歳故人王府君　　　 と**

**駅樓執手泣相分　　　に手をり 泣きてかる**

**我今到此問亭吏　　　 今 に到り に問えば**

**為報向來一點墳**　　**為に報ず 一点の**

　一年の後、道真は、再び任地に向かいました。その途中、約八十首の詩を作りましたが、そのうち**「のにす」**を紹介いたします。これは、明石の宿場で、宿の楼閣の壁に書き付けられたものです。

　春のうららかさが、反って自分の心を痛めること、それを誰も分かってくれない悲しさを詠っています。

**離家四日自傷春　　　家を離れて ら春をむ**

**梅柳何因觸処新　　　何にりてかるる処に新たなる**

**為問去来行客報　　　為に問えば 去来のう**

**讃州刺史本詩人**　　　**のはより詩人なりと**

讃岐国に帰っても、道真は鬱々とした日を送りました。春も過ぎた日に詩興を催して一人出掛けて詩を吟じても、その心を人々は分かってくれない。この寂しさを**「春の日に一人遊ぶ」**という詩に表しました。この詩を紹介いたします。

**花凋鳥散冷春情　　　花み鳥散じて じき**

**詩興催來試出行　　　し来りて 試みに出でて行く**

**昏夜不歸高嘯立　　　き夜も帰らずして 高くきて立てれば**

**州民謂我一狂生**　　　**の民は我をう なりと**

道真の鬱々とした気持は、冬でも変わることがありませんでした。道真は冬の様々な情景を描写した**「」**という九首の詩を作りましたが、そのうち「り吟ず」を紹介いたします。冬の夜に目覚めて、一人で詩を作る時にも、悲しさはつのるばかりであると言う心境を表しています。

**牀寒枕冷到明遅　　　寒く 枕冷ややかにして に到いたること遅し**

**更起燈前獨詠詩　　　更に起き 燈前に詩をず**

**詩興變来為感興　　　変り来て を為すも**

**關身萬事自然悲　　　身に関わる万事 自然に悲し**

　続きまして「」のうちの**「」**を紹介いたします。書を読む間に、風が吹き込み、自分も灯火も死にそうになり、必死になって炎をかき立てたが、燃え尽きて折れてしまったということを詠い、悲しみを表しています。

**耿耿寒燈夜讀書　　　たる夜に書を読む**

**煙嵐度牖欲如何　　　のをりて んせんと欲す**

**微心半死頻挑進　　　ば死にて 頻りにげ進めば**

**折盡枯蒿一尺餘**　　　**折れ尽くす 余り**

　道真は、４６歳の時、の任を解かれ、中央に復帰しました。その後は、藤原氏を牽制しようとするの意により、目覚ましい出世を遂げることになります。翌年、に任ぜられ、４９歳でとなりの一員となりました。さらには、その２年半後には、に任ぜられ、更にその２年後にはとなり、５５歳で遂に右大臣となりました。この間、皇室との婚姻関係も進めましたが、当時の中心勢力であった藤原氏の政敵となることになりました。

　この時代、道真は、色々な宴会に招かれて多くの詩歌を作りました、これらを順次紹介していきたいと思います。

　道真４７歳頃に、宮中で花見の宴が行われました。醍醐天皇の命により「桜花」という題で一同が詩を作ることになり、道真は**「のをして制に応ず」**という題の詩を作りました。「制に応ず」ということから、天皇の命により作ったことが分かります。桜の花の美しさを見事に表現したもので、京に帰った道真が、生き場所を得た心持ちであったことが偲ばれます。

**江櫻一種意無疎　　　 きこと無し**

**向暁猶言夜未渠　　　に向いて言う 夜 だからずと**

**香倍移於仙砌後　　　はす に移りて後**

**色添隠在故山初　　　色は添う 隠れてに在りての**

**通風鳳女粧相似　　　風てはのに似たり**

**迎月龍花樹不如　　　月を迎えてはのもかず**

**多少春情誰為惜　　　多少の が為にか惜しまん**

**九重深處萬機餘**　　**深き処 の**

**道**真は、当時皇太子であったから二時間のうちに十首の七言絶句を作るように言われ、それぞれの詩題を与えられてを作りました。そのうちの**「春を送る」**を紹介いたします。去りゆく春は、もし自分の惜しむ心を分かってくれたら、一家の宿を自分の家とするだろうと詠っています。

**送春不用動舟車　　　春を送るにを動かすことを用いず**

**唯別残鶯與落花　　　唯だと落花とに別る**

**若使韶光知我意　　　しをして我が意を知らしめなば**

**今宵旅宿在詩家　　　のは 詩の家に在らまし**

続きまして、道真が当時皇太子であったの御殿の薔薇を詠った**「のに感ず」**を紹介致します。は、他の花と同時に咲き、その美しさを競い合うようなことはしない、一目見た人をにすると詠っています。

**相遭因緣得立身　　　因縁にいいて身を立つるを得たり**

**花開不競百科春　　　花開いてわず 百科の春**

**薔薇汝是應妖鬼　　　 になるべし**

**適有看來悩殺人**　　 **たる有らば 人をす**

　道真は、宇多天皇の皇子の邸宅に於いて行われた宴会において、**「にいてを待つ」**という詩を作りました。この詩を紹介致します。

菊は枯れて月は欠け始めた。このような情景を見ると、無風流な者でも悲しみを抑えられないであろう。詩人に於いてはなおさらであると詠っています。

**月初破却菊纔殘　　　月 初めてし に殘る**

**漁夫樵夫抑意難　　　 意 抑え難し**

**況復詩人非俗物　　　や 詩人のにざるをや**

**夜深年暮泣相看　　　夜深く年暮れて泣いて る**

　道真は、詩会ばかりで無く、歌合わせにも出席しました。の時代に**「菊」**という題での歌合わせの和歌が古今集に採録されております。の浜をかたどったに植えられた白菊を波かと見立てたものです。この和歌を紹介致します。

**秋風の吹き上げにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか**

　また、道真が、宇多上皇のにしたときの和歌が、古今集に採録されております。この和歌は、｢百人一首｣にも採録されました。は、急に決められたものであったのでしょうか。

**このたびはもとりあへずもみぢの錦神のまにまに**

　このとき、宇多上皇は、宮の滝という所を御覧になりました。道真は、流れ落ちる滝の水を白糸に見立てて和歌を詠みました。に採録されているこの和歌を紹介致します。

**水ひきの白糸はへてるは旅の衣にたちやかさねむ**

このようにして、道長が右大臣になったときに、「の節句」の翌日に行われる「の宴」において、から一同に「」という題で詩を作るようにお言葉がありました。道真は**「、にいをしてに応ず」**という詩を作りました。有名な**「の詩」**です。この詩の詩の中には、白楽天の「」「」「」の三首が引用され、｢独り断腸｣の詩で、とりわけ勝れた物として、醍醐天皇から衣を授かりました。**「秋思の詩」**を紹介致します。

**丞相度年幾樂思　　　年をりて 幾たびかす**

**今宵觸物自然悲　　　 物に觸れて 自然に悲し**

**聲寒絡緯風吹処　　　声は寒し 風吹くの処**

**葉落梧桐雨打時　　　葉は落つ 雨打つの時**

**君富春秋臣漸老　　　君はに富み 臣はく老ゆ**

**恩無涯岸報猶遅　　　恩は無く ゆること遅し**

**不知此意何安慰　　　知らずの かせん**

**飲酒聴琴又詠詩**　　　**酒を飲み琴を聽き 又詩を詠ぜん**

このようにして、栄達を重ねた道真でしたが、一方で藤原氏にとって邪魔者となりました。こんな中で、宇多天皇は位を醍醐天皇に譲りました。左大臣を首謀者とする藤原氏は、この機会を見逃さず、道真に謀反の心があるとし、醍醐天皇はこれを信じて、道真をに左遷しました。政務には関与するべからずとされ、事実は流刑でした。儒者としての道真にとって、天皇の命令は絶対で有り、また、味方となる勢力もありませんでした。僅かに、宇多上皇を頼りとし、和歌を送って助けを求めました。この和歌を紹介致します。

**流れゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみになりてとどめよ**

道真の和歌を見た宇多上皇は、早速、醍醐天皇に面会を求めて参内しましたが、藤原氏に力尽くで止められて面会することはできませんでした。このようにして、道真はに送られることになり、家を離れる際に、梅の木を見て和歌を詠みました。この有名な和歌を紹介致します。この和歌を聞いた梅の木が、後ほど、道真のいる太宰府へ、一夜のうちに飛んでいったという「飛び梅」伝説を生みました。

**東風吹かばにほひおこせよ 梅の花あるじなしとて春な忘れそ**

に向かう途中、明石の宿場に宿ったとき、驚いている宿場の長に、詩を作って与えました。｢花は咲いても秋には枯れる｣と悟った気持を詠った物です。「」は成語となっております。一方、道真は、前途への不安を和歌に詠みました。これらから、道真の気持ちは複雑であったことが推察されます。これらの詩と和歌を紹介いたします。

**駅長莫驚時變改　　　駅長 驚く勿れ、時の変改するを**

**一榮一落是春秋**　　　**一栄一楽は是れ春秋**

**つ星道もりもありながら空にうきても思ほゆるかな**

旅の途中、道真は、今たどってきた道を振り返り、和歌を妻に送りました。に採録されているこの和歌を紹介いたします。

**君がすむ宿のこずゑのゆくゆくと隠るるまでにかへりみしやは**

太宰府に着いてから間もなく、道真は**「」**という詩を作りました。この詩を紹介致します。

**離家三四月　　　家を離れて**

**涙落百千行　　　落つる涙は**

**万事皆如夢　　　万事 皆夢の如し**

**時時仰彼蒼**　　　**のを仰ぐ**

　では、道真は身柄を拘束されるようなことはありませんでしたが、勅命を賢んで謹慎生活を送りました。その心境を**「門を出でず」**という詩に表しております。ひたすら謹慎した心境で有り、敢えて外出することもないことを述べております。この詩を紹介致します。

**一従謫落在柴荊　　　せられて にきしより**

**万死兢兢跼蹐情　　　たり の**

**都府桜纔看瓦色　　　はかに を**

**観音寺只聴鐘聲　　　は を聴く**

**中懐好逐孤雲去　　　好しをいて去り**

**外物相逢滿月迎　　　外物 いて 満月こう**

**此地雖身無検繋　　　の地 無しとも**

**何為寸歩出門行**　　　**れぞ も門をでて行かん**

**太**宰府に於いて、北から飛んできた雁を見るに付けても、道真には、自分と対比して、来春には変えることが出来る雁がうらやましく見えました。そして、このことを**「を聞く」**という詩に詠いました。この詩を紹介致します。

**我爲遷客汝來賓　　　我はり は**

**共是蕭蕭旅漂身　　　共にれとして の身**

**欹枕思量歸去日　　　枕をてす の日**

**我知何歳汝明春**　　　**我はんぬれの歳ぞ は**

　また、道真がこの時読んだと思われる和歌がに採録されております。この和歌を紹介致します。

**雁がねの秋なくことはことわりぞ かへる春さへ何かかなしき**

　流罪となってから、一年近くが経過し、あの「秋思の詩」を作った九月十日がやってきました。道真は、その時のことを思い出し、褒美として賜った衣を毎日捧げ持って、炊き込められた香の香りを味わい、宇多上皇の恩を偲ぶことを詠いました。この詩**「九月十日」**を紹介致します。

**去年今夜待清涼　　　去年の今夜 に待す**

**秋思詩篇獨斷腸　　　の り**

**恩賜御衣今在此　　　の こにり**

**捧持毎日拜餘香**　　　**して 毎日を拝す**

道真は、又、曾て宇多天皇の寵愛に預かっていたころを懐かしむ和歌を作っております。新古今集に採録されたこの和歌を紹介致します。

**道の辺の朽ち木の柳春くればあはれ昔と偲ばれぞする**

「九月十日」を作った月の十五夜の日、道真は月を見ながら「」という詩を作りました。「秋思の詩」と並ぶ有名な詩です。迫り来る老いの中で、自分の無実の罪を晴らすことが出来ない無念さと悲しさを見事に表した詩です。**「秋夜」**を紹介致します。

**黄萎顔色白霜頭　　　の の**

**況復千餘里外投　　　や にぜられしをや**

**昔被栄花簪組縛　　　昔は にせられ**

**今為貶謫草莱囚　　　今は のとなる**

**月光似鏡無明罪　　　月光は鏡に似るも 罪を明らかにすること無なく**

**風気如刀不破愁　　　は刀の如くしてを破らず**

**随見随聞皆惨慄　　　見るにがい聞くに随がい**

**此秋独作獨身秋**　　 **此の秋 り我が身の秋とる**

**また、道真は、このころの嘆きを和歌に詠んだことが『大鏡』に記載されております。野山に立つ煙が、自分の嘆きという「木」を滝添えることで更に燃えまさると詠ってます。また、新古今集には、自分が無実であることを月だけが知っていてくれるとした和歌が新古今集に採録されております。これらの和歌を紹介致します。**

**夕されば野にも山にも立つけぶり歎きよりこそ燃えまさりけれ**

**海ならずたたへる水の底までにきよき心は月ぞてらさむ**

学者である道真は、太宰府に於いても読書を続けようとしましたが、夜に書を読むために必要な灯火の油が十分でなく、読書の間に灯が消えることがありました。道真は、このことを**「消ゆ」**という２首の絶句に詠いました。これらを紹介致します。

**脂膏先盡不因風　　　のずくるは 風にらず**

**殊恨光無一夜通　　　にむ 光の一夜 通すこと無きを**

**難得灰心兼晦跡　　　し とと**

**寒窓起就月明中　　　に起きてく の**

**秋天未雪地無蛍　　　秋 天に雪あらず 地に蛍無し**

**燈滅抛書涙暗零　　　え 書をたば につ**

**遷客悲愁陰夜倍　　　のはにし**

**冥冥理欲訴冥冥**　　　**のはにえんと欲す**

**道**真は、秋の月を擬人化し、月に対して問う詩と、月に代わって問に答える詩を作りました。最初に**「に問う」**を紹介します。これは、形を変えるがその本質を失わないのに、雲に蔽われて西に流されていく月と自分の姿を対比したものです。

**度春度夏只今秋　　　春をり夏をり は秋なり**

**如鏡如環本是鉤　　　鏡の如くの如く はれ なり**

**為問未曾失終始　　　為に問う てを失わざるに**

**被浮雲掩向西流　　　にわれて 西に向かいて流るるかと**

つづいて**「月に代わりて答う」**を紹介致します。月は言います。「天はやがて私をっている雲を払いのけてくれるであろう、私は、ただ、西に向かって流れるように見えるだけで、左遷された訳では無いのだ。」と。天の月と人間世界にある道真とは、運命が違っていたのです。

蓂発桂香半且圓　　　**はき は香り ならんとす**

三千世界一周天　　　 **天を一周す**

天廻玄鑑雲将霽　　　**天はをして　雲 にんとす**

唯是西行不左遷　　　 **れ西に行くのみ左遷にあらず**

これらの詩に対応すると思われる和歌が、新古今集に採録されております。この和歌を紹介致します。

**月ごとにながると思ひしますかがみ西の海にもとまらざりけり**

に流されてから二年が経過し、道真は自分をやのにの故事にならぞえ、京へ帰りたいと言う思いを込めた「の」という詩を作りました。この詩が道真の最後の作と考えられます。京に帰りたいという願いも空しく、道真は９０３年２月２５日に、５９歳の生涯を閉じました。「謫居の春雪」の吟詠を紹介致します。この吟詠を最後に、「菅原道真の生涯」の紹介を終わらせて戴きたいと思います。

**盈城溢郭幾梅花　　　城にちにるは のぞ**

**猶是風光早歳華　　　 れ のなり**

**雁足粘将疑繋帛　　　の足にしては をたるかと疑い**

**烏頭點著憶帰家　　　烏のにつきては 家に帰らんとう**

（令和２年９月２３日作成）

参考文献等

　『菅原道真 (日本漢詩人選集１)』富士川英郎・入矢義高・入谷仙介・佐野正巳編。研文出版発行。

　ブログ「菅原道真千人万首」<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/mitizane.html>